

学部・研究科等の研究に関する現況分析結果

学部・研究科等の研究に関する現況分析結果（概要）	1
1. 人文学部、人文社会科学研究科	3
2. 教育学部、教育学研究科	5
3. 医学部、医学系研究科	7
4. 工学部、工学研究科	9
5. 生物資源学部、生物資源学研究科	12
6. 地域イノベーション学研究科	15

注) 現況分析結果の「優れた点」及び「特色ある点」の記載は、必要最小限の書式等の統一を除き、法人から提出された現況調査表の記載を抽出したものです。

学部・研究科等の研究に関する現況分析結果（概要）

学部・研究科等	研究活動の状況		研究成果の状況	
人文学部、人文社会科学研究科	【2】	相応の質にある	【2】	相応の質にある
教育学部、教育学研究科	【2】	相応の質にある	【2】	相応の質にある
医学部、医学系研究科	【2】	相応の質にある	【2】	相応の質にある
工学部、工学研究科	【3】	高い質にある	【2】	相応の質にある
生物資源学部、生物資源学研究科	【2】	相応の質にある	【2】	相応の質にある
地域イノベーション学研究科	【3】	高い質にある	【3】	高い質にある

1. 人文学部、人文社会科学研究科

(分析項目Ⅰ 研究活動の状況 …………… 4)

(分析項目Ⅱ 研究成果の状況 …………… 4)

分析項目Ⅰ 研究活動の状況

〔判定〕 相応の質にある

〔判断理由〕

研究活動の基本的な質を実現している。

〔特色ある点〕

- 忍者文化研究は、当初から国際発信を目指しており、第2期中期目標期間中から国際シンポジウムを行うとともに、世界的に名の知られたNinjaについて研究成果を世界に示そうと、積極的に海外での忍者講座（講演・実演）を開催した。第3期中期目標期間において忍者文化研究は、日本科学未来館の企画展「The NINJA -忍者ってナンジャ!?-」に結実するとともに、海外での忍者講座も発展させることができた。

分析項目Ⅱ 研究成果の状況

〔判定〕 相応の質にある

〔判断理由〕

学術的に卓越している研究業績が、1件との評価を受けており、現況分析単位の目的・規模等を勘案し、相応の質にあると判断した。

2. 教育学部、教育学研究科

(分析項目Ⅰ 研究活動の状況 6)

(分析項目Ⅱ 研究成果の状況 6)

分析項目Ⅰ 研究活動の状況

〔判定〕 相応の質にある

〔判断理由〕

研究活動の基本的な質を実現している。

〔特色ある点〕

- 教育学部・教育学研究科の研究目的・目標に合致した研究テーマとして、教員養成における PBL 教育の研究が挙げられる。三重大学では PBL 教育を全学的に展開しており、教育学部・教育学研究科においては、教育現場やそれに隣接する関連領域にて教員養成型 PBL 教育の開発研究と実践を進めている。この教員養成型 PBL 教育に関して、論文 13 報、著書 1 冊、学会発表 15 件があり、平成 28 年には日本産業技術教育学会論文賞が授与されるなど、外部からも高く評価されている。

分析項目Ⅱ 研究成果の状況

〔判定〕 相応の質にある

〔判断理由〕

学術的に卓越している研究業績が、1 件との評価を受けており、現況分析単位の目的・規模等を勘案し、相応の質にあると判断した。

3. 医学部、医学系研究科

(分析項目Ⅰ 研究活動の状況 8)

(分析項目Ⅱ 研究成果の状況 8)

分析項目Ⅰ 研究活動の状況

〔判定〕 相応の質にある

〔判断理由〕

研究活動の基本的な質を実現している。

〔特色ある点〕

- 様々な分野の研究者が横断的な研究グループを作り、新たな視点を持った研究や新技術の創生を目指す事を目的にリサーチセンターを設置している。
- 平成 28 年度には、難治性疾患の分子機構の解明と新しい治療法の開発を目的とした「難病研究センター」が設置された。平成 29 年度には独自技術によるワクチンの創成を目的とした「次世代型 VLP ワクチン研究開発センター」、先天性心疾患に伴う肺高血圧と小児期後天性心疾患で最も数の多い川崎病冠後遺症の小児期から成人期に及ぶ移行期も含めた血管病態・臨床事項の解明と診療指針の策定を目的とした「先天性心疾患・川崎病センター」、世界レベルのゼブラフィッシュ医学研究技術を基盤とした抗がん剤開発を目指す「次世代創薬・ゼブラフィッシュスクリーニングセンター」が設置されるなど、平成 31 年 4 月時点で 9 つのリサーチセンターを設置している。研究成果として「次世代型 VLP ワクチン研究開発センター」では T 細胞活性化抗腫瘍ウイルス TAV が開発され、マウスを用いた実験では著効を示した。また、COVID-19 のパンデミックに際し、いち早く SARS-CoV-2 に対する遺伝子組換えワクチンを作製した。

分析項目Ⅱ 研究成果の状況

〔判定〕 相応の質にある

〔判断理由〕

学術的に卓越している研究業績、社会・経済・文化的に卓越している研究業績が、それぞれ、18 報、2 報との評価を受けており、現況分析単位の目的・規模等を勘案し、相応の質にあると判断した。

4. 工学部、工学研究科

(分析項目Ⅰ 研究活動の状況 10)

(分析項目Ⅱ 研究成果の状況 11)

分析項目Ⅰ 研究活動の状況

〔判定〕 高い質にある

〔判断理由〕

研究活動の基本的な質を実現している。

第3期中期目標期間における国際会議発表件数は、平成28年度490件、平成29年度379件、平成30年度451件、令和元年度358件と、年度毎に多少の変動はあるものの多くなっている。国際会議の招待講演数に関しても同様に、平成28年度29件、平成29年度35件、平成30年度55件、令和元年度43件と多くなっている。

〔優れた点〕

- 国際会議での発表に力を入れている。第3期中期目標期間における国際会議発表件数は、平成28年度490件、平成29年度379件、平成30年度451件、令和元年度358件、国際会議での招待講演数に関しても、平成28年度29件、平成29年度35件、平成30年度55件、令和元年度43件と、高い水準を維持している。
- 地域産業の活性化を図るために地域自治体との連携により実施した共同研究の件数・受入金額は、第3期中期目標期間では、平成28年度が件数79件・金額約8,300万円、平成29年度が件数80件・金額約9,400万円、平成30年度が件数95件・金額約9,500万円、令和元年度が件数98件・金額約8,050万円である。年度ごとに着実にその実績を伸ばしている。
- 民間企業と共同開発した以下の10件の装置等において、特許申請、特許の実施許諾契約締結、企業への技術提供などにより、研究成果の社会還元を進めている。「座姿勢腰部脚部アシスト器具」、「腰部アシスト装置」、「金型高精度プレス技術」、「ダイカスト方案自動設計システム」、「上肢動作支援ロボット：アクティブギプス」、「脳性麻痺者を対象とした不随意運動抑制システム」、「ドライブロボットによる車両速度制御システム」、「変形性膝関節症患者を対象とした下肢用メカニカル装具」、「車いす使用者を対象としたアクティブ姿勢保持装置」、「コバルトフリー型湿度インジケータ」

〔特色ある点〕

- 国際共同研究加速基金において、平成30年度と令和元年度に各1件を獲得（交付金額：それぞれ1,521万円、1,170万円）している。毎年度多くの研究資金を獲得していることから、高水準の研究活動が維持されており、また、国際的な共同研究も積極的に実施されていることがわかる。

分析項目Ⅱ 研究成果の状況

〔判定〕 相応の質にある

〔判断理由〕

学術的に卓越している研究業績、社会・経済・文化的に卓越している研究業績が、それぞれ、2件、1件との評価を受けており、現況分析単位の目的・規模等を勘案し、相応の質にあると判断した。

〔特色ある点〕

- 各研究領域にはリサーチセンターが設置されており、専攻の垣根を超えた共同研究などの取組下で、平成 29 年度設置の卓越型リサーチセンターに指定された3リサーチセンターにおける研究をコアにして、物理・工学分野で幅広い研究業績を輩出している。

5. 生物資源学部、生物資源学研究科

(分析項目Ⅰ 研究活動の状況 13)

(分析項目Ⅱ 研究成果の状況 14)

分析項目Ⅰ 研究活動の状況

〔判定〕 相応の質にある

〔判断理由〕

研究活動の基本的な質を実現している。

〔優れた点〕

- 生物資源学研究科の研究業績は、査読付き論文が英文誌、和文誌含めて 186～193 報で、令和元年を見ると本務教員数 108 名に対し 193 報と、年間 1 人あたり 1.79 報となっている。また英文誌が 7 割程度と比率が高く、研究成果を国際的に発信できていると考えられる。また、科学技術・学術政策研究所の平成 28 年のサイエンスマップにおいて、コアペーパー、サイティングペーパーのうち Top10% 論文該当として 5 編以上が報告されている。

〔特色ある点〕

- 生物資源学部・生物資源学研究科には、附属する農場、演習林、水産実験所、練習船を統合した「附属紀伊・黒潮生命地域フィールドサイエンスセンター」や、平成 28 年度に発足した鯨類研究センターがあり、練習船は令和 2 年度以降も教育拠点事業を延長申請し認可されるとともに、平成 28 年度に鯨類研究センターを立ち上げ、海洋生物資源としての鯨類の持続的利用のための研究強化を図っている。また、水産実験所は、地域との連携を含めた研究活動の充実を図り、ハブ機能の拡充効果のため、鳥羽市への移転の方針を固め、現在計画を実行中である。
- 生物資源学研究科教員による「北極気候変動とその陸域の自然・人間環境への影響」に関する研究では、宇宙航空研究開発機構の地球観測衛星共同研究、科学技術振興機構 SICORPS の日露 2 国間共同研究を行っており、北東ユーラシアでの自然・人間環境変化に関する多圏の相互作用としての国際共同研究を精力的に推進している。
- 日本では初めての開催となるアジア域最大の菌学関係の学術会議である Asian Mycological Congress 2019 が三重県津市の三重県総合文化センターにて、生物資源学研究科の教員がホストとなり開催された。22 か国、400 名（海外 200 名）の参加を得て盛大に開催された。

分析項目Ⅱ 研究成果の状況

〔判定〕 相応の質にある

〔判断理由〕

学術的に卓越している研究業績、社会・経済・文化的に卓越している研究業績が、それぞれ、5件、2件との評価を受けており、現況分析単位の目的・規模等を勘案し、相応の質にあると判断した。

6. 地域イノベーション学研究科

(分析項目Ⅰ 研究活動の状況 …………… 16)

(分析項目Ⅱ 研究成果の状況 …………… 18)

分析項目Ⅰ 研究活動の状況

〔判定〕 高い質にある

〔判断理由〕

研究活動の基本的な質を実現している。

代表する研究成果である「高品質な窒化アルミニウム作製の研究」は、殺菌等に有効である深紫外 LED 開発の鍵となる窒化アルミニウムの作製に関するものであり、国際的な連携による研究活動が複数実施されている。

〔優れた点〕

○ 地域イノベーション学研究科を代表する研究成果として、「高品質な窒化アルミニウム作製の研究」が挙げられる。本研究は、殺菌等に有効である深紫外 LED 開発の鍵となる窒化アルミニウムの作製に関するものであり、新規開発した高温アニール技術により、従来に比べ飛躍的に結晶性の高い結晶を得ることに成功した。本法は低コストで極めて高い結晶性を実現できるため、産業的なインパクトも大きく、深紫外 LED 開発における世界的基盤技術になりつつある。このため、科学技術振興機構の支援の下、国際的な連携による研究活動が複数実施されている。具体的には、地域イノベーション学研究科の所属教員が国際科学技術推進事業（戦略的国際共同研究プログラム SICORP）の2つのプログラムにおいて日本チームの代表者となり、ベルギー及びドイツの研究者を含む EU チームとの間で国際共同研究を実施するとともに、ノーベル賞受賞者により編成された日本チームが中国の研究チームと国際共同研究を実施している。

〔特色ある点〕

○ 三重大学では、各部局における第3期中期目標計画に沿った教育、研究又はプロジェクトの実施、大学や部局の機能強化に資する教育、研究又はプロジェクトの実施、あるいは地域貢献の強化のための教育、研究又はプロジェクトの実施に係る若手教員の増員を推進するため、平成 27 年度より「学長の裁量による若手教員の増員措置」が実施されている。地域イノベーション学研究科では、地域イノベーション学研究科本務教員として若手教員を増加させるとともに、女性教員と外国人教員の増加を狙い、この措置を積極的に利用してきた。第3期中期目標期間においては、平成 28 年度及び平成 29 年度に本措置を利用して若手の助教を1名ずつ計2名採用し、このうち1名は若手であり女性の外国人教員を採用した。

- 地域イノベーション学研究科は、「地域圏企業との共同研究プロジェクトにより、地域社会や産業界の課題解決に組織的に取り組む」ことを研究目的の1つに掲げている。この目的に鑑み、研究科長のリーダーシップの下、地域イノベーション学研究科本務教員全員が企業等との共同研究を実施することを強力に推進してきた。この結果、平成28年度、平成29年度及び平成30年度は、それぞれ86%、63%及び60%の教員が企業等との共同研究を実施したのに対して、令和元年度には全本務教員が共同研究を実施して100%を達成するとともに、実施件数も23件と第3期中期目標期間中で最高値に達した。
- 地域イノベーション学研究科が設立された平成21年度より、地域イノベーション学研究科が主催する国際ワークショップ「IWRIS」を毎年開催してきた。第3期中期目標期間には、外国人研究者の招へいによる招待講演と外国人学生及び研究者の一般発表を第2期中期目標期間中に比べてより充実させることを目指し、第2期中期目標期間中の招待講演数及び外国人発表者数がそれぞれ2.5件及び1.3件であったところ、平成30年度はそれぞれ8件及び5件となり大きく増加した。更に、令和元年度は「第11回台湾・フィリピン・日本国際学術会議（The 11th Taiwan-Philippines-Japan International Academic Conference 2019 (TPJ-IAC2019)）」との合同会議として実施した結果、招待講演数は8件及び外国人発表者数は26件と飛躍的に国際化が推進された。
- 地域イノベーション学研究科は、発足時より「地域イノベーション学」を学問分野として発展させることを目指してきた。そこで、地域イノベーション学を研究する学術コミュニティとして平成23年に設立された地域イノベーション学会に積極的に貢献してきた。具体的には、役員である10名の学会理事のうち3名を地域イノベーション学研究科の教員が務めており、このうち1名は本学会の会長であり、本学会の運営に大きく貢献している。

分析項目Ⅱ 研究成果の状況

〔判定〕 高い質にある

〔判断理由〕

学術的に卓越している研究業績、社会・経済・文化的に卓越している研究業績が、それぞれ、1件、1件との評価を受けており、現況分析単位の目的・規模等を勘案し、高い質にあると判断した。

特に、「高品質な窒化アルミニウム作製の研究」は、学術的に卓越している研究業績である。